

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	具体的な理念を職員に浸透させていく必要がある。	法人理念に沿いグループホーム本来の姿である「家庭に居るのと同じような生活」をしていただくことを重点に置き、利用者と共に暮らす中で取り組んでいる。全体職員ミーティングで所長の思いを話すと共に、思いにふさわしくない言葉や行動が職員に見受けられた場合にはその都度所長から注意を促がしている。	現在、ホームとしての独自の理念が未設定である。開設2年を迎えたこともあり、ホームとしての「理念」や「活動目標」を全職員で作り内外に発信し、ホームの活動の中で具体的に実践されていくことを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域の行事・お祭りや敬老会などへの参加を積極的に行っている。	区長、副区長より行事案内をいただき、公民館で年4回行われる「ふれあい会」に参加している。地域のお祭りの時には獅子舞や子供神輿がホームに来訪し利用者も楽しんでいる。高校生の職場体験を年2回受け入れ、ホーム内でふれあったり、買い物同行等が行われ、また、地区社協の紹介で中学生対象のサポーター養成講座が行われ中学校テニス部の皆さんが来訪し熱心に取り組んだという。更に、地元の銀行の合唱団が年3回訪れ、毎月のオカリナ、コカリナ演奏会等などの多くのボランティアも来訪され、ふれあう時間を持っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	民生委員さん、区長さん達への事業報告を通じ、所内での活動を見ていただいている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進委員会を通じ、活動報告、また評価・要望を聞き、検討する。	家族、区長、副区長、地区社協会長、地区民生児童委員、市福祉介護課職員、地域包括支援センター職員などが出席し2ヶ月に1回行っている。活動状況や事故の報告、行事計画の発表等が行われ意見交換し運営の向上に役立っている。議事録は開示され家族にも報告がされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	担当者の方に時折、見学していただき、利用者さんの暮らしぶりを見ていただいている。	地域包括支援センターより利用者の紹介があり、入居の報告もしている。市介護保険課とも良い関係が構築されており様々な相談をしている。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し家族に連絡の上、ホームで実施している。2ヶ月に1回行われる地域包括支援センター主催の各種研修会にも積極的に参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	問題点を話し合い、利用者さんに声掛けし、安全に生活できるよう取り組んでいる。	身体拘束をしないケアに取り組んでいる。言葉での拘束も含め、何が拘束に当たるのか職員間で話し合っている。職員に命令口調などが見受けられた場合には申し送りや職員会議等で注意している。転倒の危険のある利用者には行動制限することなくきめ細かな見守りで対応している。	

グループホームこもれ陽栗田2号館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	暴言や無視、嫌がらせの無い様、職員間で注意し合う。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	対応が必要な利用者がある場合は、説明しアドバイスする。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は充分時間をかけ、説明し同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	推進会議時の意見・要望等を家族にも便りにて伝えている。	家族よりお聞きした入居前の生活歴を参考に日々の様子を見ながら要望等を把握し支援に取り組んでいる。家族の来訪は様々であるが平均すると月2回強の来訪がある。請求書はホーム便りと共に郵送し、ほとんどの家族が支払いのため来訪されるのでその時利用者の様子を見ていただき意見交換し、要望等も伺うようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体ミーティング・ユニット会議を行い、意見を聞いている。	2ヶ月に1回、全職員が出席し全体ミーティングを行い、所長より法人からの連絡や提案があり、意見交換の場となっている。また、各種研修会の出席者からの報告も行われ、情報の共有化を図っている。更に全体ミーティング終了後ユニット会議を実施し利用者のケアについて話し合い支援に取り組んでいる。福利厚生関係では忘・新年会等を行い、職員間の交流を深めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	現在で、利用者と一緒に過ごしたり、個別の職員の業務や悩みを把握している。職員が向上心を持って働けるよう、未資格取得者には、支援を心掛けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の習熟度に応じて、人材育成にパート職員もチームの一員として研修・会議等に参加の推進を図っている。事業者外で開催される研修にはなるべく多くの職員が受講できるようにしている。		

グループホームこもれ陽栗田2号館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	関連の事業所や他事業所と相互研修し、サービスの質の向上を目指している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接を必ず行い、生活状態を把握し職員にも伝えている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が求めている事を理解し、話し合いをしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人が必要としている事に対して、できる事はその場で対応し、状況を見ながら支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に行うという立場で物事を行う。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時に日々の出来事を伝えたり、便りにて報告している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	幼稚園児や中学生など、地区の子供会との交流を図っている。	親戚や友人の来訪があり、家族の了解を得て面会していただき楽しく懇談されている。友人より電話のある方もおり関係を継続している。食後、歯磨きを済ませ、洗面台脇のソファーに腰を下ろし会話を楽しんでいる利用者同士の姿も見ることができ、入居後、利用者間の新たな関係も築かれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者さん同志の話をしたり、職員も入って食事をしたりと関わり合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他へ移られた方も顔を出していただいている。これまでの生活について情報提供している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話の中から、今までの生活環境などを理解するようにしている。	ほとんどの利用者が自分の思いを伝えられる。利用者の言葉を良く聞き、今までの生活歴も参考にし折り紙や歌、お手伝い等、得意なことを見極め対応するようにしている。職員が利用者へ「ありがとう」と言える関係になれるよう寄り添い、言葉や行動を介護日誌の記録に残し職員間で情報を共有し意向に沿った支援が出来るよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前面接での聞き取りをもとに、また本人からの話を聞き、どんな生活をしていたか把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活のリズムを理解し、寄り添う。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人関係者より話を聞き現在の状況を把握した上で介護計画を作成する。	職員は2~3名の利用者を担当している。毎月第1月曜日にカンファレンスを開き、ケアマネジャーが利用者や担当職員より聞き取りをした心身の状況を基にケアプランの作成を行い6ヶ月に1回見直している。家族との面会時に所長とケアマネジャーが要望を聞き対応している。状況に変化が見られた時には即時見直しを掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一日のケア記録を職員全員が把握するようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	通院の送迎・外出など必要な支援に対応している。		

グループホームこもれ陽栗田2号館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	推進会議に民生委員・区長・社協・地域包括支援センターの方々と協働している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の希望のかかりつけ医となっている。基本的には家族同行となっているが、不可能な時は職員が代行している。	利用前からのかかりつけ医で受診する方がほぼ半数近くおり、家族が付き添ったり、都合により職員がお連れしている。また、半数以上の他の方はホームの協力医である総合病院での受診対応で、家族または職員が同行している。常駐の看護師が24時間対応で利用者の健康管理を行っている。薬は職員が受け取りに行き管理は看護師が行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員が常に利用者の健康管理・身体状態をみている。適切に行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関・家族と密に連絡を取り、対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	できるだけ、家族の希望に沿えるよう話し合いを行っている。	看取りに関する指針があり、利用契約時に話をしている。重度化した時には利用者や家族の希望を聞き、主治医、看護師の指示を仰ぎホームとして出来る限りの支援に取り組んでいる。職員の対応方法についてはミーティング等での所長の話に加え、職員同士の話し合いの場が持たれ意思統一が図られている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員の勉強会を行う。 夜勤時のマニュアルを作成している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を行い、地域の方の協力もお願いしている。	年2回、3月と9月に避難訓練を実施している。1回は消防署員参加の下で初期消火と放水訓練を行っている。また、利用者全員が参加し、非常口より歩いての避難とエアーストレッチャーを使つての訓練も実施した。訓練の際には法人本部職員の参加もあり、併せてAEDの使用訓練も行っている。地域の防災訓練にも参加予定で地域の人々にも応援、協力の働きかけを行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	トイレの声掛けも人前ではあからさまに言わない様、プライバシーを尊重して行く。	日々の利用者の気持ちに配慮し接するようにしている。トイレ誘導等、声掛けにはプライバシーを損ねないよう工夫し取り組んでいる。プライバシー保護マニュアルを用い法人としての意思統一を図っている。職員に気をつけなければならないような言動が見受けられた場合には所長が注意している。声かけは基本的に苗字に「さん」付でお呼びし、あくまでも利用者の尊厳を守りつつ家族の希望により「愛称」でお呼びしている利用者もいる	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その人に合った声掛けをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務を優先するのではなく、利用者さんのペースで、本人に決めてもらう。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着替えの服など本人と一緒に選んでもらう支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	盛り付け・配膳・下膳・洗い物など、職員と一緒にやっている。	食形態は様々であるが殆どの利用者は自力で食事が出来、職員と一緒に楽しい食事を摂っている。一人ひとりの力量に合せ配膳、下膳、洗い物、調理などのお手伝いをしている。3時のおやつは利用者と職員と一緒に作っている。クリスマス、正月には職員手作りの特別食が用意され時季に合わせた料理を味わっている。少人数に分かれ月1回外出に出掛けるよう心掛け、お花見等の後、「釜めし」、「そば」、「かつ丼」等を楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の摂取量の把握をし、体重の変化に気を付けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	声掛けし、本人に行ってもらい、出来ないときは介助している。		

グループホームこもれ陽栗田2号館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表に記入し、声掛けて誘導している。	一部介助の方が大半で、全介助の方が数名という状況で、殆どの方はリハビリパンツを使用している。排泄チェック表を用いパターンを把握し、きめ細かく声掛けし誘導を行い、気持ち良く生活していただけるよう取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便パターンを記録し、有無の確認、水分補給などしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	なるべく本人の希望に沿う様にしている。	基本的に週2回以上の入浴を希望の時間に合わせに行っている。大半の方が一部介助を必要としており、全介助の方も数名いる。全介助の方には併設のデイサービスの特浴での対応を行っている。広々と温かさを感ずる浴室でゆず湯、菖蒲湯等、季節のお風呂を楽しんでいる。家族と日帰り温泉に出掛ける利用者も数名いる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を促し、生活リズムを安定させるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護師が管理し、服薬時にはきちんと確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の得意分野を活かせるようにしている (調理・洗濯物のたたみ等)		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	月に一度の外出や外食を行っている。	歩行については自立されている方が多く、杖歩行や車イス使用の方もいる。4月～11月には月1回外出を行い、季節毎に花見、七夕やバラ園などの見学と外食をセットで行っている。外出が困難な季節には天気によりホームの中を散歩したり、昼食時には3階テラスでお茶とサンドイッチを食べベビクニック気分を味わっている。春から秋にかけてはホームの回りを散歩したり3階の家庭菜園を楽しんでいる。	

グループホームこもれ陽栗田2号館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金については家族が管理。 外出時は施設で払っている。 必要時には本人に行ってもらえるような援助を考える必要がある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	現在の行えていない。 本人の訴えに柔軟に対応できる体制づくりが必要。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者と一緒に物を作り、その季節にあったものを飾っている。一緒に掃除をし、清潔を心掛けている。	2階、3階のエレベータを降りたエントランスには利用者の作った「刺し子」が数多く展示され見事である。ユニット間は移動式の壁で仕切られているが、ボランティア来訪時や両ユニット合同行事(春のお彼岸昼食会)の時には壁が開放され広々としたホールに早変わりするようになっている。小上がりにはひな人形、五月人形等を飾り、季節感が感じられるようにしている。更に3階には地域交流スペースが設けられ、様々な交流に役立てられている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	たたみ、ソファなど居場所を作り、本人にあった場所で過ごしていただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所前より家で使っていたものを持ってきていただき、本人・家族とともに配置し、慣れ親しんだものを使っている。	毎日、利用者と職員とが一緒に居室の掃除を行い綺麗に整理整頓されており、また、使い慣れた家具等も持ち込まれ、その人らしい生活を送られていることが感じられた。洋室の他に和室希望者用に2つの居室が準備され、自宅の環境に合わせた対応ができるようになっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分でできることはやっただき、できないことをそっと支援するよう心掛けている。		